

# 東京バッハ合唱団 月報

[ 第 542 号 ] 2007 年 8 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732  
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.542  
August 2007

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 役柄を演じること、現在を生きること

「マタイ受難曲」松山公演に参加して

吉田 栄次

松山での「マタイ」の公演が終わってそろそろ1週間になりますが、今でも、精力的で表情豊かなポイヤール氏の顔がちらついています。日本語公演の際の大村先生のエネルギーにも驚きましたが、ポイヤール氏の本番前の準備もすごいものでした。合唱団に対する要求が多くなるのは当然としても、プロのソリストたちやオケに対する注文も細かく、「マタイ」をつくりあげるとい作業に徹底的に取り組む姿には感動しました。本番前日のソリスト練習を見学させてもらいました。朝の9時半から午後5時までほとんど休みなしで、ソリストたちを何度も歌わせ、伴奏者たちに注文をつけていました。ドイツ語がわからず、音楽についても素人の私には猫に小判のようなものでしたが、細部の細部にいたるまで神経を働かせていることはよくわかりました。そして6時から全体のおけ合わせ。それもほとんど抜くところがなく、朝からの練習を見てきた私は、テノール部分を一人でやる頃安さんの喉を心配しました(しかしプロとは凄いなのですね。翌日の本番も見事なもので、私の心配はまったくの杞憂でした)。合唱団に繰り返し要求していたのは機械的に歌わないようにということでしたが、オケへの注文も同じで、当然のことながら、本番中、オケの連中は一瞬たりとも気を抜いて機械的に演奏することはできなかったでしょう(日本語演奏の時にもまったく同じことを感じました)。

合唱団への注文は多く、逐一紹介することはできませんが、特に印象に残っている二つのことを書きたいと思います。一つは、第1曲の最初の「sehst」のところで、「すこしぐらい音が違っていても聴衆は気がつかないでしょう。そんなもんだと思って聞き流すでしょう。しかし、ぴたっと音が決まれば、必ず聴衆はその美しさにはっと心打たれる。私たちはそのように歌わなければならない」と言われたこと。どの部分をとってもアバウトで、しかも、そんなもんだ、あとは原曲のよさがどうにかしてくれるだろうと思って自分を許してきた私にはショックでした。しかし、そうした音程のいい加減さはすぐに直せるはずもなく、その後の練習では必死に隣のドイツ人たちと声を合わせるように努力しました。本番で聴衆はどのように聴いたでしょうか。私にはわかりません。しかし、これからの私の課題をはっきり与えられたと思いました。

二つ目は、イエスをこづいたり、からかったり、十字架にかけると叫んだりするドラマの中の役柄を演じる場面と、それを見つめるコラールの部分の対比を、緊張感をもって明確に表現することを繰り返し要求されたことです。これはポイヤール氏だけでなく、私の経験したどの指導者も要求したことであり、特に松山報告として述べるべきことではないかもしれませんが、しかし、これはマタイ受難曲の多面的で重層的な魅力、特にそれを合唱で歌う面白さと深く結びついていると思います。そして、それはこの2年間、「マタイ」に浸り(実際のところ、その大部分は音取りとドイツ語の読みに悪戦苦闘しただけのことですが)その中で個人的にとりともめなくあれこれ思ったことと絡んでいます。ポイヤール氏が強調してくれたことによって、改めてそれを意識させられたということです。

「マタイ」にはいうまでもなくイエス、ユダヤやペテロなどの弟子たち、ピラト、祭司たち、民衆といろいろな人物が登場します。合唱はその多くを演じます。この中に裏切り者がいると言われ「それは私のことか」と問う弟子たちの役もやれば、「十字架にかけろ」と叫ぶ野蛮な民衆もやり、「そは死にあたり」と宣言する裁判官の役もやります。それらの役では女性たちは男になったつもりで歌えとも言われました。さらには「われは神の子なり」とイエスの言葉も直接話法で歌います。裁く者も裁かれる者もやるわけです。裏切る者もやれば、裏切られる者もやるわけです。先生たちにはその人物になり切って歌えと言われます。そうした言葉は、演劇を指導する人であればおそらく誰でも言う言葉で、特別なものではないでしょう。そして、指導を受ける側も特別なこと、異常なことを言われているとは思わないでしょう。

しかし、その言葉を額面どおり取れば、実は私たちは大変なこと、大変興味深いことを要求されています。私たちがその要求に応えることができるとすれば、私はこの私でありながら、同時に民衆の一人でもあり、祭司の一人でもあり、ユダヤでもあればペテロでもあり、それどころかイエスでもあることになります。実際、バッハは恐ろしいことをやっています。福音書はイエスの言葉を伝えているだけですが、バッハは何と「声」を出させているのです。生身を与えているのです。イエスの声を出す者は二重の意味でいわば不敬罪(長く生きている人に

ソプラノ独唱カンタータ 楽譜(訳詞つき)

カンタータ第 52 番《悪しきこの世よ なれを頼まじ》

<新刊> ISBN4-925234-56-0 本体価格 1200 円

今夏の特別演奏会(世田谷 7/28、野尻湖 8/4)で、光野孝子さんにお歌いいただくのを機に、予定を早めて発行したものです。

カンタータ第 84 番《われ足れり わが幸に》

<既刊> ISBN4-925234-08-0 本体価格 1200 円

2000 年、「50 曲選」第 1 期配本として出版され、すでに各地で多くのバッハファンに愛好されています。

は嫌な思いをさせてごめんなさい)を心配しなければなりません。一つはイエスが問われた罪、すなわち、神の子を名乗ること、そして二つ目はキリスト教徒にとって神でもあるイエスを演ずるということ。合唱にしても「我、神の子なり」と言う以上、同じことで、恐ろしいことを要求されているのです。しかし、ここで言う恐ろしいこととは、同時に私たちの在り方に関わる、とてつもなく興味深いことでもあるのです。

そもそも歴史上の人物であるイエスやユダにどうして私たちはなり切ることができるでしょう。イエスやユダは単に私がいくつかの情報から思い描いているだけの存在ではありません。しかし、私がイエスやユダに「なったつもり」になれるとすれば、少なくとも私は、私がそれではないところの誰かであったということもあり得るということ、つまりその人物は私と無縁ではないということを知っていなければなりません。

ソリストの演ずるイエスが「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ぶ時、私は私自身が叫んでいるような気がします。その時、私はすでにある程度イエスを生きもし、演じているとも言えるのではないのでしょうか。そこに描かれている人物たちを私たちが自分自身の可能なあり方の一つとして了解できる時に初めてそれを演じることができる、それに声を与えることができると言えるでしょう。実際、私たちが了解できる主体であるとはどういうことでしょうか。当たり前だと言われるかもしれませんが、私が私であり、私たちが何かであるということは、石ころが動かしがたく石ころであるのとはどうやら根本的に違っているようです。

私たちが歴史的に存在する仕方、この世で演じる役割は、環境、状況によって多種多様であり、対立し合うものであることさえあります。そして同じような役割を演じていても一人一人の顔つきが違うようにどこまでも多様です。「マタイ」ではこうした世俗的な違い、たとえば祭司を演じる時と民衆を演じる時の違いとはまったく質を異にするもう一つの差異の表現が要求されています。それがボイヤーレ氏の強調したドラマの中の役柄を演じる場面とそれを見つめる場面の対比です。

演じる者とそれを見つめる者といっても、それはプレーヤーとそれを外野から見ている者という関係ではありません。人生に外野スタンドは存在しません。見つめる

者が、演じられていることを理解するためにはそこに何らかの仕方に参加していなければなりません。演じる者自身が同時にそれを見つめる者でなくてはならないのです。簡単に言えば反省や内面への回帰ということですが、そこで起きていることはそう当たり前のことではありません。それは自分や他の者が世界で演じていることの真の意味に気づくことであり、それと同時にそれらの意味が頭わになる次元を私たちが備えていることに気づくことなのです。それは先に述べた私たちが単に何かである、あるいは単に何かを演じているだけでなく、それを可能にする、了解する主体でもあるということに気づくことでもあります。この飛躍、この決定的な場面の転換は、演じる役柄がこの役からあの役へと平面的に変わることとは質的にまったく異なります。垂直方向、あるいは異次元への転換と言いたいところです。実際、多くの方が経験されたと思いますが、「マタイ」を歌っていてもっとも緊迫し、もっとも充実した瞬間の一つは「十字架にかける」と叫んだ後、「いかにおそるべき」と歌い出すまでの「音」のない、長い短いともよく分からぬあの時間ではなかったでしょうか。

バッハはこの平面的と垂直的の両方の転換を合唱に要求しているのです。それはとりも直さず、私たちの存在の二重性、すなわちそれにとってこそ世界が意味をもって現れる主体でありながら、世界におけるあれやこれやの有限な存在として生きざるを得ないという私たちの存在の仕方をそっくりそのまま表現することを要求しているということです。

うまく説明できたという自信はありませんが、キリスト教徒でもないのにマタイ受難曲に自分がほれ込んだ理由が今になってよくわかります。確かに語られているのはイエスの受難の物語ですが、私にはバッハの与えたこの曲の重層的構造により、この世を生きる受難としての人間の存在の構造そのものが見事に表現されており、またそれを表現するよう演奏者は要求されているように思われるのです。どこをとっても、私は私自身のことを歌っているような気がするのです。

PS

私は往復の飛行機代がもったいなくて、ボーナスの出ない自営の身分をいいことに、11日間、朝飯付き1泊3800円の安宿に滞在し、すべての練習に出させてもらいました。そして練習ではドイツの人たちと歌うというこのチャンスをフルに活用すべく、自分から頼んで190センチを超える大男の間に入れてもらいました。右隣のウェルナーさんは「マタイ」を歌うのが5回目、左隣のアルブレヒトさんは30回目ということで年季の入った楽譜は持っているものの暗譜で歌っていました。彼らが歌うのを隣で聴くだけでもいい経験でしたが、彼らは私の意欲を買ってくれたので、親切にも私のドイツ語の発音についても注意してくれました。たとえば「bist du」の「t」が聞こえないとか、「bin Ich」がピンニッヒに聞こえるとかといったことです。「Wasser」ではヴァーサー

に聞こえると言われ、びっくりしました。自分ではヴァッサーと言っているつもりだったのです。そして、恥ずかしながら認めざるを得ないのですが、彼らは私と違って専ら大声を出すことに快感を覚えるといった様子はありませんでした。最後のパーティでは贈り物までもらい、つい、フライブルクでまた会いましょうと言ってしまい、どうやって行こうかと思案しているところです。

最後になりましたが、こうした貴重な機会を与えてくださった橋本先生、松山の方々、そして大村先生に深く感謝しております。あらためてお礼を申し上げます。

(団員：バス)

< 同時代作家の紹介 >

## 村上春樹 / カズオ・イシグロ / 羊、をめぐる断想

真鍋 孝子

最近、脳内が羊でいっぱいになっている。眠れぬ夜に羊の数を数えるということではない。むしろ、熟睡できすぎてありがたい毎日を送っている。

...

羊は古来、家畜として存在してきた。太古以来遊牧民の生活の基礎は羊だった。人は羊の群れを追い、草と水を求めて移動して生活していた。羊は従順で、群れの中で互いに争わず、沖繩の豚のごとく、「鳴き声以外はみな食べ」られて、くまなく利用される。ネイティブ・アメリカンにとってのバッファローのように、単なる動物以上の存在であるといえる。日本人は遊牧民であったことはない。奈良時代に朝廷に貢物として献じられた記録があるものの、本格的に羊の放牧が開始されたのは明治以降、北海道においてである。わが国の羊放牧の歴史と経緯は、村上春樹の小説『羊をめぐる冒険』に詳細に記されている。

羊は毛を刈られる。羊毛は人間に温かい衣類を提供する。古来、子羊は神への生贄となった。はがされた皮革は衣類やテントとなり、肉はジンギスカン料理となり、モンゴルでは臓物もくまなく食べられ、乳もチーズや酒となり、はたまた脳みそまで料理となって、捨てられる部位はない。1956年の映画『ジャイアンツ』では、エリザベス・テイラーが演じる西部の大牧場主の新妻が、野外パーティである料理を指して「これは何？」とたずね、「羊の脳みそだよ」といわれて卒倒する場面がある。牛やバッファローだったら、暴走もするし人の命を奪うこともあるが、羊はかつて人に逆らい、襲い、命を奪ったことはない。それどころか羊は、不眠に悩む人の脳内にあらわれて、「一匹、二匹・・・」と数えられて安眠を助けさえる。羊は「従順」や「温厚」の代名詞ともなっている。あるいは身代わりになって罪を負う者(スケープゴート)の。おとなしく温和で群れを成して行動し、よ

### 東京バッハ合唱団コンサートの御案内

#### 第101回定期演奏会

2007年11月17日(土) 16時開演、中央会館ホール(東銀座)

- ・モテット《イエス よろこび》
- ・カンタータ第65番《もろびと シバより来たり》
- ・モテット《歌え 主に向かいて 新たな歌》

出演 = テノール：鳥海寮、バス：佐々木直樹、ほか

#### 第102回定期演奏会

2008年6月21日(土)、めぐろパーシモンホール

- ・カンタータ第102番《主の眼は 信仰を見たもう》
- ・カンタータ第67番《留めよ心に イエスを》
- ・カンタータ第169番《神にのみ わが心献げん》
- ・カンタータ第182番《あまつ君を よろこび迎えん》

出演 = アルト：佐々木まり子、テノール：鏡貴之、ほか

#### 練習スケジュール

8月中の練習は夏季休暇です。9月の練習開始は、土曜日(世田谷中央教会、15:30-17:30)9月1日より月曜日(目白聖公会、18:30-20:30)9月3日より

< 入団歓迎 > すべて日本語で歌っています。皆様の参加をお待ちしています。小学生～大学院生まで、団費無料。

き羊飼いは、はぐれたたった一匹の羊さえ、探し出して群れに連れ帰る。その間、ほかの羊たちの群れは秩序を乱さずに草をはみ、眠りながら待ち続ける。もくもくと交尾し、子を産む。子は成長してまた子を産み、人に貢献してやむことがない。

村上春樹の羊関係の本は、『羊をめぐる冒険』のほかにも子供も楽しめる絵本(『羊男のクリスマス』)がある。

...

『海辺のカフカ』を読んで以来、強く惹かれるものはあったものの、その後、まったく興味をなくしていた村上春樹を、最近になって読もうと思ったきっかけは、カズオ・イシグロの研究をはじめからだ。長崎に生まれ、人種は日本人でありながら、5歳から一家で英国籍を取得、英国人になったカズオ・イシグロ。イシグロの作品をすべて集め、読んでゆくうちに、最新作の『Never Let Me Go』(邦題『私を離さないで』)にたどりついた。

周知のとおり、この類まれな傑作は(代表作となるだろう)クローンのお話である。正確に言えば、クローンである31歳(もう若くない、クローンの寿命)の女性が子供時代を回想するというものである。表題の“Never Let Me Go”自体、イシグロと親交の深い村上春樹が彼にプレゼントしたCDからの命名だという説もあるうえ、イシグロが雑誌『クーリエ』のインタビューで述べていること(彼が評価する日本の作家は存外少なくて、村上春樹と大江健三郎だ)から見て、二者の関係は相当深いと思いついた。クローンの話とはいえ、『アンドロイドは電気羊の夢を見るか』(フィリップ・K・ディック)におけるレプリカントや、『ロボット』(カレル・チャペック)の労働ロボットのよう、人間に反逆するのではない。粛々と死におもむくのである。人間に移植する臓器を提供するために。

・・・

この小説を4回読みなおしているが、常にひっかかることがある。「ロボット」という言葉の作者であるチャペック以来、(SF小説では)人造人間は人間にたいして、彼らへの搾取に歯向かい、いずれどこかで叛乱をおこすものとして書かれていた。フィリップ・K・ディックがマニャックに書き続けたぞっとするような悪夢の未来社会は印象深い。彼らが本物の人間と見分けがつかなくなり、人間と同等の知能を持ち、搾取に耐えかねて反撃にでる。

ところが、イシグロのクローンたちは、まったく正反対で、むしろ、特攻隊のごとく、嬉々として、使命感すら持ち、4回のドネーションで命を終え、その後はヒトラー政権下でユダヤ人に対して行われたように、工業原料として徹底的に利用つくされる。たぶん、ミートショップにならべられるのかもしれないということも匂わせている。もっとも、世界最初のクローンとして世界に認知されているのが英国のクローン羊「ドリー」だったことを思えば、イシグロが小説のどこかに「羊」を隠しているかもしれないという期待はあった。しかし、彼らは人間、それも英国の最下層の人々を「モデル」としたクローン(複製)で、外見は「大学生」のように見えるとある。

彼らがどのような外見(ルックス)を持つのか、ということについてイシグロはまったく記述していない。ディックのレプリカントならば人間の欲望の用途に従い、戦士は戦士として、愛玩用なら、それなりに作られている。だが、イシグロのクローンたちは、ただ、人間の「すべての病を一掃する」目的のために生産されるのだから、美醜は関係なく、ただ健康で、よりよい臓器を提供すればよい。彼らはむしろ性行動を奨励される。そのほうが体調がよくなり、より良い臓器を提供できるから。しかし避妊の処置がしてあり、生殖機能はない。彼らは子供から思春期を経て青年になる。カップルとなり、真実愛し合っていれば臓器提供を遅らせてもらえる、という一縷の望みをもっている。浮かびあがるのは、針のメドほどの希望もない状況で精一杯愛しあい、友情を燃やす若者の群像だ。臓器提供用クローン。

造り主の人間を超えて高い知能と人格をもつにいたった、全寮制学校ヘールシャムの「生徒たち」。この小説では多くの言い換えがある。生徒はクローン、完遂は死。消費されつくす「羊たち」がときに、愛する者のために自己を犠牲にして死にゆくときに、この小説はSF小説を超える。だが、なぜ、彼らは従容として死にゆくのか。

その疑問を解く鍵は、イシグロのほかの小説に共通するテーマにあるだろう。ブッカー賞を受賞し、映画化された『日の名残り』の主人公の生き方が如実に物語るように、イシグロの関心は運命に逆らって闘う人間にはないからだ。イシグロはつねに運命に従順な、時には自分自身をあざむいてまでも大義名分を大事にする人物を主人公としてきた。時にユーモアを交えながら、彼らの生き方を描くイシグロの目は終始一貫して温かい。偽善と

いってしまえばそれまでだが、たいていの人間はそうして生き、死んでいった、とイシグロは言いたげである。

“Never Let Me Go”という曲は、ジャズのスタンダードナンバーで、甘いメロディーをもつ曲である。主人公の女性は幼い少女のとき、この曲をカセットで聞きながら枕を抱きしめて夢見心地で踊る。彼女は歌詞の‘baby’を、彼女にはけっしてかなわぬ夢、「あかちゃん」と解釈した。その光景を偶然目にしたマダム(ヘールシャムの経営者。上記)は涙をながす。その理由はクローンの少女が抱きしめている枕を「失われた良き時代」と、見てとったからだ。「人として最高の教育を施し愛情をあたえたなら、クローンに魂を持たせることが可能である」という仮定のもと、実験として行われた結果、母性愛すらもつクローンの少女が枕を「あかちゃん」に擬して夢見るように踊る。その場面は、もくろみの成功であるクローンが「失われた古き良き時代」を抱きしめて踊っているようだ。

臓器提供用クローン製造に成功して大半の病を克服した「いま」。それはユートピアなのか。ディストピアなのか。マダムの涙は喜びの涙か、後悔の涙なのか。どこまでが真実でどこからが偽善なのだろうか。読者としては、この涙が「憐れみ」のゆえんだと思いたいのだが。イシグロは一切の感傷を排して軽やかに綴ってゆく。クローンをテーマにしながら、この小説の行間には「羊」が垣間見える。さらには人間の尽きせぬ欲望の果てに犠牲となる、最下層よりもっと下層の「人間」が垣間見える。

・・・

日本人から英国人へ、さらには世界人に。イシグロの視線は境界を超えて、人間のいまと未来を描こうとする。対照的に村上春樹は日本を離れ、アメリカに滞在して執筆を続け、自己の意識の底深く降りていっては戻る営為をくりかえしている。彼の小説がクチアタリよく、オシヤレであるのは確かだ。だが、村上の「羊」が、『羊をめぐる冒険』では世界の闇を支配する「何か」とされたように、基本的に村上の世界はすさまじい悪意と恐怖に満ちている。村上はそれを認めたくて生きてゆく人間を書く。イシグロが国境を越えた水平のベクトルを持つとすれば、村上春樹は自己の無意識のさらに下位に降りてゆく下方へのベクトルをもつ。二人に共通しているのは、ありきたりの言葉だろうが、「良心」であると思っている。

村上春樹『羊をめぐる冒険』講談社、1982年。

Kazuo Ishiguro,

*An Artist of the Floating World*, Faber and faber, London, 1986. *A Pale View of Hills*, Vintage International, New York, 1990. *The Remains of the Day*, 同上, 1993. *The Unconsoled*, 同上, 1996. *When We were Orphans*, Faber and faber, London, 2000. *Never Let Me Go*, Alfred A Knopf Publisher, New York, 2005.

(団員：アルト)